繪本小栗外傳

三篇

三

へ13
3249
5

へ 13
3249
5

馬

昭和十一年
一月二十四日
購求

神戸
夜話
藏書記

寒燈小栗外傳卷之十三

東都　絳山戲編

第廿三編

病を破寺ふ投して山寇を殺す
途を草廬ふ索く兩婦を見る

斯く小栗が郎等九人の們ハ日ゝ〳〵ぶして熊野山ゑ到る。小栗夫婦ハ見奉
さるふ夫婦の喜び斜ならぬ。遥々道ハ速ふ歩行を裝ひ給ふ。九人の們を
主君の悪癩入主く愈ゝ。昔にかゝ〳〵ね光景ゑ夫婦悲なゝ涙く袖ト
きり。正ゝ附助を人〳〵ふ對人。そも我此地方に居ること。誰が教へく乗ふ
問ゑよ。池の庄司をみ出ゝ中ゑ。我く常州ゑ忍び敵の光景ハ霞ハ
這般ゝ〳〵ゝ年ゝと常所上人ゑ還舎しゝ。結城右朝の獲ハ詳ハ有人
有家を細ゝふ〳〵ゝ問ゑ。小栗夫婦ハ今ふとゞめぬ上人の道徒を常ゝ

今所堂塞九人まで集ふ人。俗云討のこと計をべきまあずと。多くこと評議とうとふ
父小栗満重ハ。一回鎌倉殿の御勘気と蒙しりのなり。且俗をとしおりふ一式
詮秀を。鎌倉殿の寵臣なれば。彼を討んと私に欲ぐにいろゆもして赤松軍
の免許を蒙り。爾して詮秀が討ぞを。鎌倉どのゆ弓ゆくなど。世の人ハも
云念なり。免まれ角まを便宜が求ゆ。赤軍家のハ免ハ好ぐとこれを主従
京都ニ出を便宜を求むるゆ。赤松ハ赤軍の御代かとゝせるゆふ蔭なるべ
爾ゆべき便も弱ぐうて。空しく月日が送りなれ。茲ゆ美登小左衛門ハ鄙ニ
濃州ゆ照天姫を守護し居るを処ゆ。万長が汗より足ハ討人と襲来しと
伯父とともに出ハ防ぐ戦ふうち。姫と伯父の去向を失ひ。此不彼処捜索れ
どもさらゆ知ること。とハ万長ゆや擒まのゆふと。青墓ゆ立ち城ゆ窮ふゆ
万長ゆ汗ゆも居のゆどさてハ殿のハ跡を慕ひ。東国へやりゆふらひ

爾ゆべきれより東国へ赴んと。鎌倉まで凡り。其道そぐゆ伝ひ
姫君のこと。ハ父ゆ更ゆ知ゆよゆ。斯ゆハ常陸ゆや城ゆうゆふと。鎌倉ゆ
立ち往ぐゆ行く下総国那須郡が赤ゆ著ゆり。此所ハ足九月末の天なれハ
日のあしひとう短くて。那須野の原ハ半ゆ。コハくゆや西ゆもちまちの宿棲
ひとゝ所村烏出村とて飛声のゆも情ゆうの悲しく。ゆくゆはけくも
主君のこと思ひ出されぞうゆも。旅の衣れ袖露しを。ぞ行み居るうちゆ
日ゆさゆや既ゆ暮ゆ果ゆ。そもく此野ゆハ昔近衛院の宮女玉藻と云ゆ
化して野干となり。此所ニかくまをりしを三浦上総の支介ゆ勅定ゆて殺
ゆゆゆ。神通自在を弱ゆ。老狐なれども。王君の勅命ゆ逃れ難
彼女ハ矢先ゆかゝて。此郊原の露と消しゆど。尚ゆ霊の石ゆ止り。妖怪が
なせ。玄羽和尚の道徳ゆく。悪霊終ゆ去りしゆど。今ゆうの修験のう

時々こゝかしこの怪異あり。殊よ今夜の月うすく四方のあやめも弁ずあり月ふ
こゝろりの遠かゝふ叢の裡の狐火と耳ふ学るりのとそふ声も怪れの色
音く友を呼なる狼の声さへうゝ体夜嵐の身に志ゞとものすごき
りのなりせば。氣も消ぬ心も失ぬべき。公剛なる丈夫の忠義の為れ旅なれ
斯りの凄き所ことをもせど。足ふまゝ引して歩ミしが暗夜ふ途をとる先くあくあ方
ゆゑ迷ひ入れ行どもく野を出ぬ。殆ど疲労ふ果ふ着く遥の森の祠ようて
一道の火れ光閃出ずこゝ宜敷の所あるこの所ふ火の光あ人家なれば
さて彼所ふたどり行ば。程も用も做べきふと火れ光を目当ふ。茂る草を踏
つきて。足ふはゝして行ばふ。安くも火の光ある処ふ至りぬ。此所ふ
是を窺ふよ。ふりる寺ふ。杉曲ミ影墻破ふ荒れ。人の住ともなりぬふ
所とももはゝ。き方の燈火の消ぬ。こゝ何人の住やらんと公理不尽ど。

斯てもあるべき所ふ。ゆゑ案内を乞て。えやと門の戸をほとくと叩けど。
唯と回答して生ずり。戸を却用く者あり。彼人紙燭を持ゆ。その火影ふ
すかしこゝるふ四十ばかりの法師の眼きいが栗のごとくが身ふ法衣をまとゝ
甚猛悪げなれば。大自星の如き圓の眼をこゝろり。小声ふ此法師が光景を
こゝはゝ。ちなり。小声ふ此法師が光景をこゝ此寺ハ山賊の巣穴
なりなれよ。ふく是を猜ずば生命ふ。今さらの如く絶ばし。爾ふ彼
ゆゑどのこゝをせん今宵をこゝふ投宿をかり。此法師がこゝさへ
言語を和ゝて云くりけるふ。某を主元国のりのみく。東国方こゝくんとく。
こゝるぐと此所まで来たるふ此野の道ふ迷ふ。今宵ふ歩みそぐりこど。
里の方へ出ぬ。殆労ふ。宿をせどやと思ふ。遥ふ此所寺をこゝ受
はれば。労ふ足を曳てこゝふ来る。然こゝ今夜の宿を乞こゝ人とこゝふ。

僧は最苦のよう物を案ずる郷なりしが。今の言語を聞て打驚き恐て回廊のもとに
立のふぎとれ迫鄙の。殊よ荒果なる古寺なれば夜会ゆきらこ。はゆ〜しとべ戎
飯ぐ〜を。それぐゆ厭ひのつぐは。這裡ま入りて宿りたまへと。前ゆ立て誘ひ出
小を弟ぐるさゆ〜て。僧の殿ゆはひく裡ま入まべ。厨の方ゆ僧ひ足を洗し
地爐の邊ま居人煙茶の食遊〜。さて云ふ前ゆもやとぬ〜かる破ちの
ことふそ人まは一飯の貯もれ〜。今日はとりて其少〜く病まべ村落ま出く
鉢ぐまひ〜ふぐ。客人りの僧〜もぐさぐ銭を出〜の人貧道市ゆ行て酒飯を
取来ぐ〜ん。小太郎宜ぐまぐ〜いく飢ちり。爾れは房を煩ゆきんてとひと
畏〜と躊躇ぐ。法師ゆ若〜かくん。ぐく銭を与へ人。速〜せべ市ゆ行くとも。
酒飯を買〜と僧促ま。いぐ〜らば房を煩ひ中さんと。腰裡ちり銭を出〜く
与ゆれば僧は浅を数へて。とれゆそは幾許ちの酒飯を買べ〜と。厨の棚ちり矢陳

さ紙陶子を出〜。客人ゆ府行ちく〜ち買ぐ。悪ら人表方さ〜ぐ走せ出
又立戻りそひゆ。ぐてを加ぐは幽陰の古寺なれば日別ねてこ。メ月ま経て
ゆも僧ぐめと。ふく怪〜みゆ。ぐ角世所ゆは生ゆひそと。念須
ゆ文へ書て再び出ね。小太郎僧の言語を聞て。ぐふぬをゆと
思ひ〜ゆ果〜て盗人ぐてあり。彼酒飯を買ぐ〜んとは僧ぐて。同類と
いを来ぐ〜べ〜。烏合の盗賊ゆわどの事ぐ〜せん。懼ぐ〜ゆ。ぐてふざれと。此方
ゆは一大事を懐ぐれば。みぐゆ謾ぐる。失ゆぶ。悔ともかへ〜じ。彼ゆ。ぐてふざる
前ま此所ゆ走ぐ〜ん。爾あれいく餓ぐる。僧ぐてすゆ。ぐふ食べりのを手燭ぐ
かけ。厨の裡を隈なく捜索ぐれど。露ぐりの物もなし。あまりゆ驚ぐ。
客殿へ行ぐ〜ぐるゆ。本尊は阿弥陀仏ゆ。ぐゆ。ぐ足を切れ破れ
蜘網濃ぐり。香爐は嵐ぐの痕のみ市〜。香はいろ焚〜ともえへど雨漏ゆ

那須の古寺ホ
小太郎
山賊を殺す
美堂小太郎

小栗卷之十三

ゑなんどゝ腐れて草生ずる。此光景をみて思ふ。阿弥陀そもそも佛
なれど。此本尊の弥陀の如きかいと洒落し。佛も人も幸不幸さあり。
本尊も我身のうへ似ずゝゝあやと獨呟き四方を顧ふ。とをりから本尊の
後背のうしろに新の声笑へ。されば。いろゝと不審ながら。堂の後を廻り
此所へ位牌堂とおぼしく。本堂より續たる小き堂あり。堂裡を窺ふに
六道絵化の地獄図。湯杖を枕にして庶ゝ。こめわの閻羅王。三途川ゑ
脱衣婆。牛頭。馬頭の鬼どもゝ。宝冠を枕にし。或は肱枕にして
虎の皮の褌を出し。西さまの東さまの仏。酒肴散乱して中に高ゝ
鼾して熟睡ゝ。小太郎これを熟着。今此るゝ化物を青書生の
ゝるなるべし。物千歳を経ると云へば。必ず妖を做すやいなんこと。年経て
古盗人の旅人を戒し物云へと。形姿代へ。ゝゝ。今夜も吉利有り

ゑや。酒肉に飽く熟睡せり。我今餓ゝ。此酒肴を貪り食し。化物等
醒し後。瞻をはぶさし笑へと。配盤の前に叩を立て。飲わどふ食ふ。
幾斛の酒肴を露も残さず飲食し。六七尺の酒樽を帯び。心裡頻に楽しく。
此ものどもを殺るに。厨まんものを四方を入るゝ。古る鋼鑼を火槍とし。側ゝ
ありしうばこを宜ものゝとぎあれと。炭灰もうち捨て力みまして撃はしるゞ。地獄
閻魔をたゞおどしみる。数るひく目を醒し。起ゝて足元ゝ仁王のごとく
大後ゝ。枕を上ゝ立踏り。鐘のごとく声を揚。念仏を唱へ。銅鑼を拍子にうち
居ゝり。地獄大きに怒を色。任侠ゝ方へ行ゝ。此狼藉者のまこと。
ゝど我ゝ。告ゝし人ゝ。油断なゝ。ゝと。身ゝ。ゝ下知をれば。閻魔も鬼
の仏ゝと答へ得物を提ゝ。小太郎を中に囲ゝ。小ゝ呻ゝと打笑ひ。
此地獄ゝ酒肴多くありぬと。ゝ陽府ゝ此所へ来ると。

さるぞの酒肴をく飲ませふつ孫八奥もなく。せめてのことふ泄おが賜をさまさし
藝ばくしさしてなりとも慰まんとさてとそ銅瀉を打ちうぞ此拍子に打連く。
躍をおどりゑさー孫と飽まぐ歎き笑へ〻は地義いこれを笑ふうも腹を居
く孫錫杖を小脇に提げ躍出形奉の悪三老陽府みありてもゆつくん地義
の面も三回まて廻まれば腹を立といふ諺あるを忘ーや泄じめてまて
酒肴を盗んぐ飽まぐ食ひそれより銅瀉を打ぐ〻ど我々が孫ぐりを弾さし
今又孫〻を歎ひく流く嘲哢をーたること是此こその罪を作るこが意悲を
主とする我ぐふ。そのはくふ八免さんぐ。泄をーて修羅道に落さんざる
ふそん悟せよ。のふ閻王も獄卒も彼を脱ーまひそと湯杖を振くうんく
かれば閻魔も鬼も一般に鉄棒をんどふり揚て小ぎ中目ぐ走寄ぐり。
小ぎふて是紙物ともせど。我手〻ぐ代肯ひく。剣鉾の躍ぐる我も根ぐに

ぐうぐふ。よく躍ぐよと云ぐも腰の佩刀抜放ち地義が打ぐ湯杖代。
只一刀ふ切落ー。甚ぐく踏ぐみ大袈裟ぐ斬ぐうぐう足を
足るぐう閻魔も鬼も脱衣婆もかるぐ。と逃走ぐ代脱ぐと或ぐ梨子
割車切又撲切ぐぐもあり。一盞茶付ぐ残なく斬殺ぐ立ぐ表の方
を望ぐるふ松明ふりーて大勢の這程をさーく来るさまうれぐ。ぐく
前刻ふ出行ー。主の僧は同行を伴ふー選ぐ来るぐん足をも殺ー此寺の
盗賊の根を断ぐやと。分搭ぐーて立ぐぐ。又想ひ人を待ぐ待ぐ我身
ふ容易なぐふぐふ大ぐふ。ぐ形式ぐ代ぐ。若ぐ失ぐふぐ者ぐ
いづれの分をりて忠義をせん。今殺ーぐふ者ぐふ酒狂の上は戯ぐぐう
時運ふかるひ分を傷孫ねぐ。ぐれ幸ひとひぐぐー脱ぐ去ぐ姫ぐ
慌忙く行李を背負ひ裏の方より脱れ出ぐふはじてぐーぐぐと既ぐ

七八丁ふ及びーぶ。五三人の人を殺ーそのまく走り已ことなれば。息もきれ身も
労ま。とある木の根ふ腰を掛。老ぢ休憩てありそれど。素より不知案内
の地方と云。猶ふ暗夜のるのやーめれば。此所を何方と乗りゆく。如理危や
角おりふ処ふ。おのれよ均ーさ人ゐるや。今すやー道を焼ーなく。たゞ一人ーく
まるものあり。間近くゐれば彼りのの。経るひとは光景ふて立止りてもとし
えゐ。甚所ふ居ゐふ何人ぞと。問ふ正ーく古寺の悪僧の声よ似ゐりしぶ。
這方も経るき星れよ。さしえまば偽ゐるゆゑこゝ空とゐ弱ゆく逢
りのよと我ハ別ち甲夜のゆど。汝ゐ寺ふ宿りゐれ。旅人ゐるゐと云ゆくも。
曜ゐかんそ技打ふ声を知ゐべみそゐ。ゆきゐゐと斬れど。啊とのひはく仰さゐよ。
イトゐとえくゐしぶ。水音ーて貌ゐ。こを妖怪ゐてありしゐと。其いとゐ弱と
捜ゐさしゐゐふ。古井とおぼーく圓く深き穴ありさてハ此古井の紅へ

落ゐれよと。ぞめそ仏安堵ゐく。甚危ふれことゐりと。それゐり途を捜索。
行ゐ三丁ばゐに七一軒の白屋の前よ出ゐり。此家ふ立寄休んとハ思ひーそ。
こも又絨の住家ゐりやと。疑仏を発ー。密ふ垣を越て窺ゐふ。旅行ふ二人
の女性。人ゐち都よ緝麻く居ゐり。一人を年ハ三十ゐやゐとえく。又一人を
三五ばゐりの小女。いづゐも醜ゐくふね容貌ふて毋ふゐとえれば。その面似ゐ
何ゐ及ゐうゐべき家ゐばゐ。外よ男子ゐ。もゐえ人ざれば。たゐ人賊の家ふゐとせよ
仏おくべきこゐもあゐじ。此所ふて湯ゐりとゐも清く。餌をも休めんと戸を叩く
と叩いて案内を乞へば。三十ばゐりの女。唯ゐ回答て出ゐり戸を開ゐ。声低掛。
今此所ふ来ゐりゐハ何人ぞと云ゐ。小ゐ旅ふ某ゐゐハ旅の者ゐ。仏せゐ泊ゐこと
あハゐ。道を急ぐまくふ宿ゐべき期をゐ。人家もなれ世をたどりく。ゐの
処へ吟味来ゐるゐ。此所家をえゐりゐべゐハ。暗夜の焼火雪中の炭。此所ふを

ゑてハ労まも出一里を歩むも怠わびぶ。頻まゐふして休憩ゐあさてこそ
蓑をおどろしたれ一夜の宿を乞ふまゐ。ふなくも畏れば是ぞ
那はゆふまきまじ。皆附てゐ体ふハしのひゐんやと餘儀なく新さ仕度
女ハ裡よりさー歌き。小左衛門さゐ戸窺ひえ。ゆゑて戸を推開れ物語を
承るゐいと傷ハ〜くゐわどゐ。這程よ入ふしの人といくば小左衛門ゐ
爐邊ゐ腰うちかければ。女ゐ茶を汲これを飲し。秋の狂風の吹くゐれば火ゐ
ゐくらしゃさんと。柴折くべく焚ゐる。火影よさらし小左衛門ゐ身かくゐ
すしうちゐるゐ袖や裾ハ朱の血ゐよ染てありしば。咳然としく驚きゐ。
俄ゐ立て物陰ふ。小女を招きさくゐを。小左衛門ゐ手りこれハ是我衣の血ゐ
を見出何ゐる人ゐと怪ゐて戒厳ゐるゐて。ゐくゐん斯なれゐ人ゐ。
彼ホゐ身もゐやゐれば。問明めてゐんのと。女ゐらようち對ひ。ゐこと等ハ

我衣の血ゐほよ染ゐを不審て驚きゐふとゐぼゐくゐ。ゐまゐゐ少ゐ我縁故
ありゐそハ跡ゐて語り付ゐふん我ゐこゐゐる二人ゐて此故ゐ家よ居ゐふ
ゐこふゐく怪ゐむ事ゐ。ゐくまゐ語りゐ人ゐ為悪ゐハゐ女ゐかぼ
ゐ合ゐ。ゐ角の回廊ゐりしゐ。歩附ありて年婚女小女ゐうち對ひ。ゐんゐハ
ゐとゐぼゐゐらん此旅人ゐ今ゐんゐ達ゐ人ゐ達ゐ人ゐ傷害ゐ人と
ゐ人ゐて。衣類血ゐゐ染ゐ世ゐ志ゐのゐどゐ言ゐれゐ。ゐと恐怖ゐハゐ人ゐも。
其骨柄を窺ゐふよ尋常ゐふゐ豪傑と。ゐゐ是ゐ刀ゐ我上ゐ憂艱辛を
云ゐメゐ只顧ゐゐむ程ゐふゐ鯨よゐる磯鹿仆ゐ誘引ゐくゐゐ。ゐ彼ゐ
呵責ゐれ。恥ゐゐゐ公受ゐんゐゐ遥ゐ堪ゐるゐゐゐ。ゐ刀ゐ所由
いゐみゐゐやゐと云ゐメゐ事ゐ。小女ハ喜ぶ色ゐゐて。命ゐゐゐゐゐ。ゐ涙ゐゐ拭ゐ
ゐまゐゐゐゐ。ゐ人ゐ小ゐゐゐゐ。ゐゐ對ひゐゐ云ゐ。我ゐ刀ゐ人ゐ。ゐ人ゐ包ゐ

郊原ふ
奸智を
殺し
て
途を
草庵ふ
問ふ

小太郎

ゆゑに艱苦を救ひまゐらせよ。奴家も小女も素より都近きものゆゑ、たゞ
さへ此地方をうろ〳〵射山賊のために奪られて此所より擒はれの身となりしが
爰くの賊よ嬉戯まし〳〵。幾許の苦ぞや猶〳〵斯ばかり添く恥しめを受る
此身は生存命。居るべきあらぬ極ども難面りのは心まで。今死をこそ易
まれと故郷の親族よ今一回逢てく苦艱を告げへ。急も角も做ぞきふと
一日くとぬるは其隙を伺ひて脱を出んと仏祇配をば賊もまこと足を猶し。
其守厳みして去ぬ。万夫ふ尚の勇者あらで誘引出ざは逃まがこし。
足下のやうを窺ふ。人を害〳〵ものども。親父かうふね光景は世よ比ひなれ
勇者とこそ。あられ我〳〵二人ぞ多況。救ひ世の人とぞへ〳〵れ。小を称首尾ちぞて。
笑へはるばくふあれば。さぞや悲〳〵あんぞらんされども斯る離を恋よ只
二人〳〵居るなれば。脱を出んを難うるまぞきふ。なぞ速よ走りまらね女ちち

ゆゑて云愚のことを宣ふりのう形暗夜よあれば此所の四方はこれさもふまじきう。
はいふ各よあふ鳥川と印幡沼とふ狭まれて只西方のを陸よ續々り。そこは
古寺ありて賊多く會へり。其寺を過ふざれば代よ出ぞ。ことりて賊のる護
ありとこそ中せり。小を称云我を育其寺まふ宿り。這般〳〵のことあり。其のち
途中〳〵又如此〳〵の事ありと。古寺のこと。途中もしく傷を殺せるみ
細やかを語りられば。二人の女を愕然と驚きまどふぞうこ。小を称不安ゑを
悪傷を殺せ〳〵と笑より猛るく渡〳〵さよ傷よ由緒の人のりやゝ又は賊の同類ら。
此二つの内ふくふば我は則ち敵ふり。女ふぐふも其旋云を報んとおりふ仏あふば。
立上りて勝負せよ。運をば天は任をべ〳〵。いざやく〳〵と急ぐさふ女驚然左右ふ
うちふり。否〳〵爾るりのふし。今も笑へやさこく賊ふ仇こそあれいく〳〵
彼ふたゆよ死んや奴家二人が驚きし古寺の傷を容易討ふと宣へ。

彼傍の足盗賊の大将なり。同じ悪徒の群るぐらに。さてが出家のことなれば世に惜むべし故さあでの非道もあるぬるら今日まで存命居つれと彼亡のらを いろるらん憂目に遭も知れがら。扨こそ驚あれ傍ば成と波しるふと。部下の賊に知るまじくれば明且まで誰とても此所へ来ることあるべ。幽静の休憩なり明日に至てぶいうもして奴亦二人紙使ひ。此地方を出さしまへといふうち一人の女厨の方より酒肴を拵出を毎夜賊の為て飲食べる料に付とて。山賊治めて為ることはまし是を飲食て労れを慰めるべやと。いふ小をうちを拵ひ。もとらが足を我とろ行うう。明日は必ず付ひく。此地方を去れべ。你くれる案じるひそさいうとて出ぬる。山酒肴はおとなるが。明日此地方を旅発の壽く酒宴を用べ。人こは今夜の主なり。一杯飲ぐ我よさせいざやと鈍ふとまにとれば三十斗りの女子が。爾ふば命を任せんと盃をとり揚く既に呑んとて折のら外方暴ふ闇く。寂人の為る光景なり女はさふ形り小太郎も伽ごあやこたちあるが。そ村小女を戸の隙より外方を窺ひて立戻りつ云へりさ今こふ為るものは傍の部下のものどもあて伽をう荷ひ為るる。先客人を奥へ入ぬ村忍びるひ孫と一室の裡よおー入ぬる。

第廿四編

壮夫郊原ふ草賊を討
孝婦白屋ふ我男ふ舎

且説小を弟は女生るぐらふふ陸し一室裡ふ忍び居て紙門の隙ようさし覗き。その光景を窺ふ。二人の女は外方の戸を押開けが男人が一太るのこそ出来るとて。ある方へやと云あひら何ゆら荷ひ家裡ふ入やよ狡猾を打拵。奇を出し孫るとにぐふ嘯めきうるふ何なるらんと熟くくれば彼古るの

僧の血にまみれて息も絶〳〵になりて居るを女ちかくハこハいかに何人が打くれ
做しぬと人〳〵に問へバかき荷ひ来し人のうちに手長といへる道子がいふ今夜
旅人の寺に来りて宿りをこふ和尚座さるゆゑと見るにいと猛くして丈夫なれバ
よき餌めのとおり人とも。小勢にてハ敵對がたしと旅人をあざむき寺に留
和尚自ら我們を呼び集へて還り来けるに旅人ハそれを隠して捜索なるに。
豫て妖物に扮しゐる地蔵の六閻魔の大蔵。牛頭の丑。馬頭の字六。三途の
婆まで殺されさてさて旅人の所為なるゆゑいかに猛き人なりとも案内
知らねバなにとて遠くハ逃まじきにいざ追付て仇討せん。我〳〵を西の
方を尋ぬべし。此方ハ武家を眼るなれバ。くらに足を止めんハ必定なれどもやとて
ぐし失ひてとめやと。和尚自ら来りて我們ハ西の方十町ばかりも追欠しが
遂に人影も見ざるゆゑ此方のなれ寺はいしく走居りける途にて古井

裡に呻く声。これ何者と松明を照らし。さし覗けバ彷彿と和尚の貌に見え
たるまゝ辛じて引上るに断重傷を負ひぬ何人の所為なりと問ひ答る
啼虫の声音も衰えて息だにひ。さまとぶ仲間の大将をむざと殺させし手のごく
さに攻せめておかみなる末期のあはれふさしからんと荷ひ来ね此手傷ぞ叶ふ
まじ。社介保をなしゐる人ハ和尚を斬しその人ハ猜する処今のひとし旅人の所為と
おぼえずなりさる旅人の此家へ来りしてハあふぞやと何に女も涙を流し前に
此所ハ旅人の来りしゆゑにいろいろのわく欺き足をとゞめさし熟くみるに袖袂
血にまみれ染くありし故これハ曲者と思ふうち。尚弱りく妻くと血をはく身の
うへを問へバ鈍くて寺のこと和尚を斬しゆゑ人も詳に語りゆへしやるゝ忽ち
讐を報ひんと想へど彼ハ尋常の丈夫ならぬ勇者ぞと猜しそれぞ是に謀て
より頂備へしおく麻木酒呑してこれを殺さんと既に酒宴をせんぞとすう。

小太郎

おんこら此所まゐるさるふこゝ宜処へまゐるべく酒を勧むるまでも也いでくの力なうゝ仇を討んと伺ふこと繁ちする風情をみせ彼所の一室に忍こまり足下多とても此年比抹殺よ大切よと呼ばれ人の敬ふ奴亦二人に助太刀をこそ彼を討さしめひ給と二人相〳〵伺ふこと此所まゐる盗賊ふ渾一般ふ兼〳〵女を案内ふ這社のこと討入くんざる光景ふ小太郎これを密ひく〳〵されば〳〵こそ宮初より女だらの非まゝ〳〵不安とこんしふ忘勧めこる酒盛もみぐりふ呑ざるへ斯めるべきこゝ〳〵うゝ我猜疑ふ差ねへ天の助ふ亦〳〵かく〳〵高運のあるべれば邪悪の賊と戦ふこと恐るべき少へあらぬ彼多へ土地よ馴〳〵れよ且多人のこと好まざれば不知案内の此所のうゝ過失ふ〳〵こも云かゞし乱賊の為ふ身を害ば主君ふ對〳〵ひこまる不如此所をこゝ去て急ふきこそ忠義なりと急ふ斧戸の垣を越まして走こゝ行こゝ

みゝ川流れ又大泥みて水深く渉もゞき身ふ人色小太郎今ハ行こゝ〳〵きゝべ旨辺よ立こゝ嘆息〳〵我忠義入全くせんと思ふ病うのと盗賊ふ手ふ気ふるこゝを不顧此所まで脱まゐるれど此巨川や大泥ふたゞ一渡の家ふ形〳〵皇天我を〳〵此地方と去〳〵めるこゝ〳〵躊躇うちよ襲れるべ尚此上の恥辱なり さゝふば足より立戻り盗賊ふと戦ふ彼ふを殺〳〵こゝ又此身をこゝふ失ふ二ッふ一ッ変せんと思ふ悟極めて今身ふる途を求めてこゝ戻る さて又賊方みて旅客を捉へ討こゝ人の仇を報ふと既ふ一室ふ打入こゝ〳〵こゝもいこゝふ旅人を何地へ退去こゝ新ぶふこゝ〳〵今の光景を密〳〵知りて去ばこゝ西方へ走〳〵ん〳〵我〳〵此所よ在つれば知ふざるこゝ〳〵東の方へ切つこん彼方を川と大泥とふ生る洲寄ふ混りなれば翼なくして逃こゝ〳〵いで追結て討こゝ〳〵手傷の傷こゝ〳〵殿を暴ふて走こゝ

とも知らざりて小太郎ハ引還して手負しが。只今賊が松明をうちふり来るを遥よりみるふ折ゝ風ふ松明の火を吹散らし枯残る萩や薄ふ燃付を熟くとみるゝ内。此野の赤き草のごとく。川よりも一叢る。今此賊を彼所よ生捕ん。生捕ん為ハ枯草よ火をかけんざるものゝ。前ハ海き水ありて逃ゝ生べき処なし。幸い今夜西風なれば。後の野火の烈ゝ敷て焼ん。焼ん失ぬ。はや命ハ助るとも牙城焼れ捕ざ。然るとてハ男女を付ん。これ蜃竟の孫ぞと獨喜び生茂る叢の初ふ牙城潜め賊のくる所待所よ。賊ハ形とも知らざりて旅客ハふ猛しとも。不知案内のものなれば逃ゝ来ふハ。よもあじ。袋の裡ぬけのよるも尚ほやとと勇みたゝ。競ふて此所よ来る。行ふ程なく彼等のごとく所よ至る。小太郎附ふと密ひく。叢の中を立出。腰ふをりて枯草をふ早ふ苅とり盗賊のゝ通れ跡の道ふ積て腰の

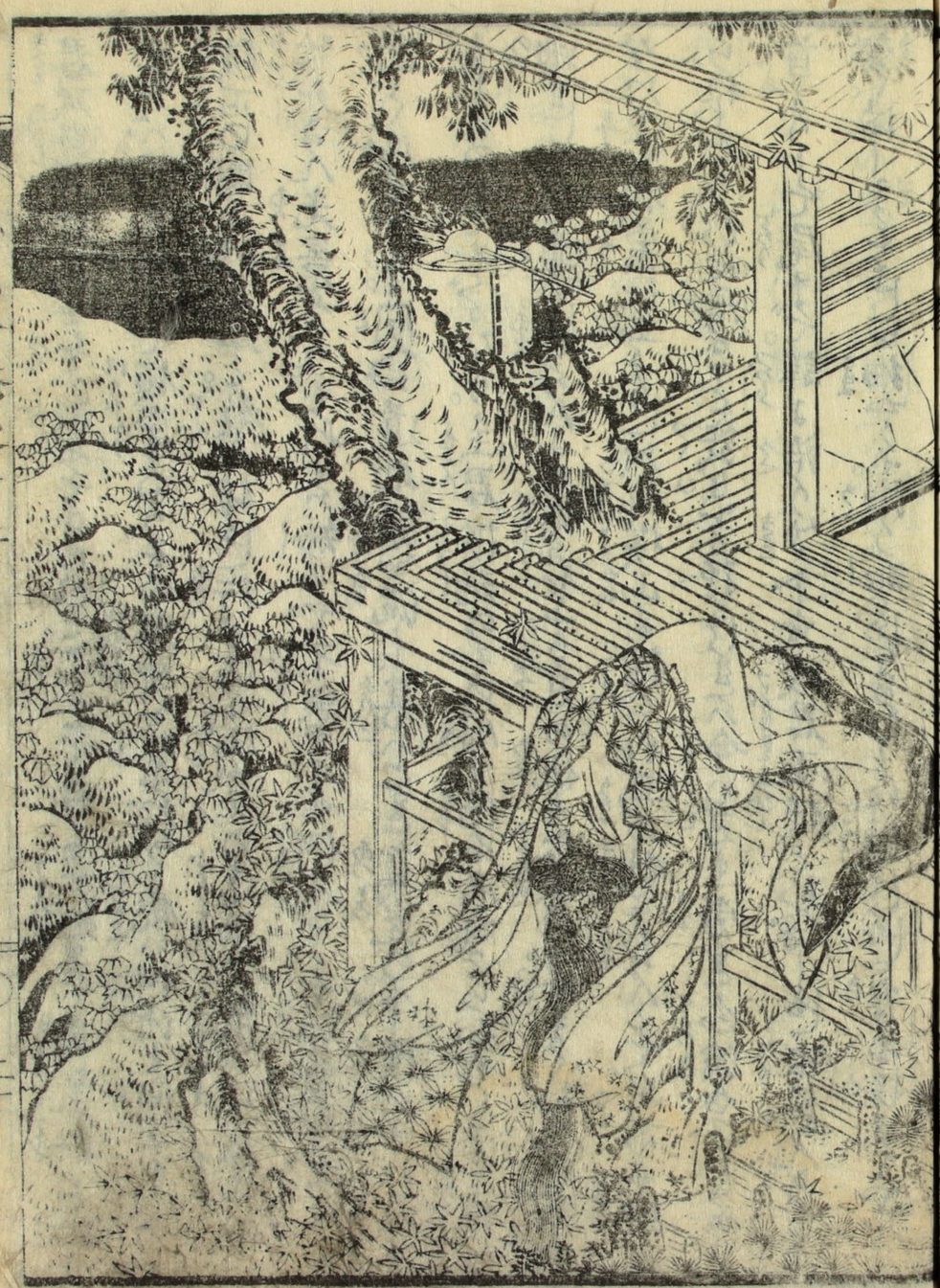
燧をとり出。ゆゑて火とぞ移ゝ。折ふら吹来る夜嵐のいとゝ吹ゝ。枯草ふ火ふ移ゝ。枯草伐ふ焼ゝ。戒の方へ靡きしゝ。賊ハこれをハほよりもおりひも。かけぬとおれば。只惘然るばかり。次第ふ火勢盛んふなり。草木もいとゝ一般ふ。焼くゝゆ。慌忙く盗賊ふ。逃ゝ衣類よ火移り。鳴き叫びく死ゝるもあり。或ハ煙よ咽ふ失ひ。川へ落ひく死ゝるもあり。水火の責ふ多人の猛悪ふ盗賊の強盗ふ数所ふ。そして亡びゝり。是年手ふの積悪を皇天振怒ゝ。ひて手を小太郎ふ借ゝ。此所ふ亡び。ふるゝ。まゝ小太郎ハ死地よ入ゝ。脱ゝ難ゝ。しふ不思議の謀をゝ。ゝ。其牙恙ふ。ハのみふあらゝ。賊を殺ゝ。ゝ。智勇のいまを。ゝ。忠臣の誠を天も憐ゝ。冥助をたゝるゝ。積善の家ふハ慶あり。積悪の家ふハ殃あり。ゝ等のゝ。ゝ。斯て小太郎ゝ。この

賊衆を殺しけるし。再び前の賊の家に至るべし。二人の女房ありけるに泣居
るり。小太郎血刀を提て家裡に入るべし。女房驚ぐ所。小太郎大喝
一声して云。汝賊婦我を欺き。虎穴に入しめ。殆命を失ひとなりしを
天翁の助まうり。我一人の力をもて。賊を殺しまうり。今又こゝに来りしは
汝をも誅せんとなり。汝我所為を見おりぬべうぶべし。足まで幾所の人民
殺し。其多の果報をなしたる報ひ。今日想ひ知るべし。汝は生るるため
汝を還る。聖人の言語確乎たりと云けり。猿臂をのべして女の襟を
ちうと捉へて。仰さまに引倒しつゝ刀をとりて既に刺んとせるに小女を
足をとゝるよりもあるべくも縛りけきそゝさをまじと弄ぶを。妨げせそと
り放つ。腔竅は小女が心下をぐさと刃を刺けば。急所の重傷にて一声
あつとどろふめくるも。其まゝ息絶てたり。女をこれをうちえ寄りしま

殺さる所。赤絲あるも。分たべと云あをあびに最期の一言なるべけり。こゝに人
あるも逢ぬるべ。奴家が思ふ志気を云。侍べくるに。奴家が父ふ数るふねりの
あるあれど武士の禄をも食しものなりしが。不図ハ世のすべ人生家の大故よ
家亡び。女主の去向を失ひね。父其るもの少くふかたくひとれ半あれば。
女主の在家を索ぶるに。一言を述て危角もなりうんのに思ひしうど。刃乃
分しるる旅費なく。躊躇のあをるるを忍びて父を誘て此刃を。美濃国
ある青墓の里に名るる万長が許に奏まて刃價を父の旅費とるさしめて
故主の去向を捜索ふ。生ものしかるや。世間に此刃ハ
長が許に居り。まる称とふ名をはして倡婦とるりてたべれちゝ。あるに万長
去年の秋。小萩とふる美羅女性を抱えびりを倡婦よせんとさるべぶ。
ゝあれど此女。固辞して果しうが奴ゆ怪べを欺婦ゆ。あひ下しつせめ使ひ。

他人目も憚り給へ。そこ物の数とも世ごと思ふ。ことに帝へ仕るが。ことに石縁故
ありて。小萩が賊に奪れね。跡うて尋べ其人が奴家が父の召されける娘ぞと知て
悔めども。何方へもあとをとうるや。知すがなれば甲斐なく。一日一日と過
せ。こちら今年の秋は首のころ蔡沢寺の上人の一人の餓鬼阿弥陀仏とく
ぶく。鞍馬の温泉ふやらんとて。青墓の里に立ちはがそれよりはたそこの女性
あり。それとそ原に万長が嬶婦なりし。小萩よと人の風声みゆ。あるを今の
こそ人が不幸とこの思ひども故主の事。うち捨がく青墓を密と忍出るが。
今の主人を欺けば。報いいともおそろしや。主道よりて今こそ知ていたの侍ふ
出奔つるを幸ひと。銭くも無駄く行道を問ふ。やとく懇ふ。使ひもんと尋ね
ひ。嬢一人まつた仏沢ゆ。こは彩りと思ひきや足盗賊の大ねこれ縁くね
此才と欺れ此不連られ妻とうるとり。仏のあくね縁はあれと訓源寺の
妹脊の間女仏の渉ろ母も仏の頼と尋へ。勇ることあるが身は捨て。
宿志を遂さし沢さ女と云。言語お刀よ。ふ。で用日を送りしが。悪
昧ぐは探るはれ。ふ只今足下ぐまに死ぬる命は惜まと我父親の
志気。雖ろ故主ふ告ふ。抑故主とらひけるとと云附小左衛門とを。
捉へ。脇を放ちゆ。ろと庶して言語を正。そは名武常陸介多光云
あはあ。ぎやといられて女は悔恨と怪られるぐら小太郎を熟くうちと猶と
捉命のごく故主とらは。多光ふ。こ光ふ。こ法ふ。斯云奴家を名武京の。
数ふもあふね下ざ女のなを仕せ。道助ぐ。女児ありとは知る人なれ。賤。武身
あて仕ふ。爾宜る是下の名は何とうは何をりて名武を奴家が故ふ
とは。知りのあとも仏沢ざれ。細と清くうられと。問ふ小左衛双眼ふ流
涙あさし。傍き歩付回意ゆ。ごり。時ありて泉うちふみ疑ひ者ふ

道理なり。斯云我が小栗家の眤近の士の甚一人美濃小太郎為久なり。
と父て如ハ又驚れ。父の聞ゆ及ぶ名武の山家の右馬ふ矢生度と仕へ
られ。その子息ゝてはまさとう。いろゝも美登小四郎が世降ゆてあるぞ。汝
ぶ父の道ゆぶ。ゆるる果てぶ我知れり。と且ゝ云知せん。そらまづおてら
姫君のゆぶ矢の上ぞ氣色ハ。おとぶ今の嘲ゆハ慰せ人敵ゆるふとあるゞ。
其後のくゆ知けるゆ。青柳ゆを尤右ゝふり。それ去向の知れざれぶ。いろ
ゆも捜索やとぶく。斯ハ乞も身ゆ痩ゝ憂さ人塊ゆぞや。是何ゆるぞ父の
為ぞ。その父祝の身ゆ果て。知ゝあとと宜ゝとゆ。ゝふゆ
おろく涙ゆり。小太郎ゆ且ゝとうちゆて。幾回ゝ嘆息ゝ。凡娼婦の心根ゝ
涙まるゝぞ為ゝゆ。生ゝ真祝を知ゝ知ゝ敷ゆる情さよ。我也待ゝと
身ゆゝぶさゝも嘆ん不侵やと。猛きさ丈夫も孝心ゝ感ぞる涙ゆ眼ゝ
語ゝふ長ゝてゝ彩ぐら。公武静ゆてよく伊。そゆく我君助重ゝ継母の後
ゆて湯衣の身ゆ忍ゝてはまさとうち。大殿小栗殿重ゝ一色と云侍人の。
讃言ふかけられて。鎖金殿の口ゆ受させゆふのとなゝで。おん傷
まゝくも下総の小栗の城ゆ失ゆふ此よゝ毎助重ゝ遥ゆ身ゆひて
より。原来孝子ゆはまさせゆ。悲嘆ゆ流ゆゝぶ此ゆ一色従秀ゆ所為
なれぶ速ゆ。彼侍人ゆ討ゆて滅重ゝの口ゝ合を晴ゝゆくおぶ。我
們をゝ俱ゝて鎖金さゝて行ゆふ相撲路ゆて不図照天姫ゆ遭ゆる。
此姫君ハ縁てゆ。親殿ゝちの許ゆて汗衫ゆゝゆぶら名武の山家ゝて
后何處ゝ忍び居ゆふとも知ゝでゝ。ゝぶ思ひきゆ叔父様山ゆ
おゝしまさんとゝ安秀ゝゆて我君ゆ恋を懐ゆ幸ひと姫君をゝ
歩府足を止め歪鬼神ゝふ荒馬ゝ食殺ゝて年来の遺恨を晴ゝ



小太郎
青柳

君が斯死彼馬を乞静めてのられと乞て君を生質て馬を術を使
うべ些も辞まで傾聞あり。その鬼神を祭でおく既に何地と同うまく
彼西の園より付らんと教ゆはゆ行々ほよ汝が父の道助で既の辺より繋ぎて
殆死うん光景うり。それとも知らで不審さゆ何人わ〜て仇をこうこと
斯く居ること。同べ道助涙を流〜。某へこと篤光の下僕の中に左分
とかりのあてさべるなり。主君撲死のその時。偽を去るべらもあくこと仇と
逃亡し父の罪が贖うんとゆ姫君ゆう君の仇を安秀と告まくおりひ去向
なれ主を捜索に出るり。仇撲山ゆ擒られ馬の秣ゆ食んとて此ゆ郷ゆ
られなり。彼て居ること幾日を。孫ほ〜と今ハ分も労を仏消ゆべ〜ゆと。
首ようて尾まで。詳よ語り今〜。我君不便ともば〜也。姫のおん身の恙
なく。ゆ〜まをよしを細ゆ語り知しまひ〜に涙はあ〜きの撓うてやうと

嬢ゆけの色うく〜笑ふ。今世の名残みて〜ゆ。ゆ〜ゆ。
より女ハ御目伏〜。終ひ〜〜く嘆きゆ程ゆて新ふりあげ嗚呼落命ゆ
我父ゆ。非業の死をとられゆ主の仇ゆ撲山ゆ死〜ゆ浅猿や
さぞ口惜念ゆてあり〜ゆ。さわさり彼ら姫君ゆ怨家を知しるまふと
せめてのゆと仏ゆ。おば〜弁ゆ仕ゆ失せゆふと祈ゆ白柏子
娼婦の人ゆ。ゆ〜歎ゆ。ゆ〜ゆ。我ゆ吸日ゆ。今日ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。宿志を遂ゆ憂旅ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。悩ゆ。ゆ〜ゆ。泣涙人ゆ知ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。知ゆ。ゆ〜ゆ。祝ゆ。ゆ〜ゆ。意ゆ。ゆ〜ゆ。
つゆ。ゆ〜ゆ。悲ゆ。ゆ〜ゆ。音ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。

励しつ悲しみて云ふ道理なるべし。今又漢ひとく注ぎたることさほどふかきあ
るべし。足より姫の御殿に暮ひ参りて云ふ事願ふ。して結ぶ。仇としかりあ
横山と討とて者と云べられ此志にあらずやと涙あらられて青柳の身に
起ち人〜姫首しある蛾〜の小を年君知〜ね前〜に云ふべらもんこふ仇とる
けるを身を悪〜とのあ(ゆ)さとて助けるのみ。べいみで安教とこあふこと。
深きは恩ひぞや。甲斐なる女の身なるべらも。主と親との仇敵とこの横山
鬼神でも蛇とてもあれよ姫君れは。恐ることもなく一太刀ぬ怨と勇
ましくて健気なれ。此時前列より重傷なく動けもならで居とりる城傷
がらと起ち。さてものれらに助手なる由緒の者とてあり〜彩よ仇ろけうん
我ぬ足横山殿の部下に由利の新発意と云へる大将軍にてあるべし首
まして旅人ぬ尋常なるれ心油断なく甲夜に不図傷所へ

洗傷なれども仮りて手傷とえせ〜ぬ油断さ。討取ぬ為なるべ〜や又ぬ
かるて。名武の下僕が女児とぬいひ〜ぬ知りけ〜ぬ生〜もく〜ぬ
りのなふ絵と。今日まで生〜ぬ汝を餌ぬ旅人ぬ欺ぬ〜ぬ銭欲を
奪ひ〜ぬ為なり。今ぬなれが生ぬ主ぬ思ぬ恩ぬ仇をせよと云つも腰の刀を
抜討ぬ斬〜とぬ〜ぬを小太郎が。其腕を引〜ぬ〜やぬ青柳ぬ此城ぬ怨ぬ縁ぬ
撃ぬれど。女ぬ撞ぬも夫とし。此月ぬの因あれば。さて又ぬあてぬれまでぬ為
少も主の飯云殺〜ぬ汝や某が君ぬ云ぬ奈ぬ云ぬの。出物ぬよきりのごと
言語と共ぬ投居ぬ起〜ぬも立ぬ首ぬ河ぬ。此折夜ぬ〜ぬ明且ぬ〜ぬ捜離ぬ
鳥ぬ声小太郎太ぬ〜ぬ〜ぬ鳥ぬ然ぬ祇ぬ使ぬ今事ぬ声ぬ〜ぬ〜ぬ主君
ぬ必ぬ恙ぬ。然ぬ陣ぬ〜ぬ〜ぬ神ぬ告ぬ〜ぬ〜ぬ早ぬ彼ぬ〜ぬ。
見ぬ系ぬ〜ぬと立ぬ上ぬ青柳ぬ奴ぬも俱ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

易なれど年若き女を伴ひ行くこと人の疑ふも心憂し。況ハ跡より耳ねぶ
蒸し引ねと青柳ハ魯人の娶婦を拒しハ己が身ひとつ潔く古人を慕ふのみと
ゆく。女の云ふ所ハ理なれども小を忍びざるとハ大謀を乱と為らん業なり
あり。忠我のあハ斯どう。些細のことにかゝはらふ大事を誤りまゝなく
誹謗とらけまゝん。強て伴ひまゝらんと申ハ我ども今世間の繁しきを知ね
旅路ハ女子の神。今まゝ命の世界の人よいまゝん又禍ハ遁まゝ三人
公事煩まゝす忠をせんとしなくて前のわくハ那代れ。はそれとも夫の出
せ言語細も舌れ及ばねとて思ふ伴ひまゝもようまゝ同じ旅路を行
まゝ爾ゝてんあハ害めるまじいる尚厭ひのあるこ云ふ小太郎ら微笑女子ハ
伴ひまゝ道ハをよくハ云も述ひるよ望まゝ法華ふお色旅路を熊野まゝ
ひまゝ。滝谷殿を憚れば泄も我が身を思ひ結ひ乱者を拾ひん

神戸大学附属図書館蔵

青柳ハ女子ら。命定ハ爾ハ賞し賊の奪ひハ道者の衣裳もハふ。
これまゝ長櫃の裡を探ゝてさ出せ。小太郎大きゝ喜びて物の
整ふハ主従切を入まゝ吉兆とゝそ笑色し。いざとくとゝ三人衣裳
を気揃はく。熊野路さして立出ね。茲ハ紀伊ハ賊党ハ横山ハ部下の城主
由利の新発意とて。限りなき強盗し。此所ハ巣穴を営み旅客を行却ハ
術計多くなり。或ハ地獄の鬼を示。又ハ猛獣怪異を現し人ハ恐れ驚き
消さ。ハを失ひて金銀衣服を奪ひ。それのこなふ。容貌美麗き女ハ
あまた。足をも奪ひ或ハ妾とし。あるハ售ね斯悪逆を行ふ。それ人の上命
を知ハ又多く。皇天の悪ふ。小太郎ハ為ハ。一時生野を出れり

小栗外傳卷之十三畢